



野槌

上七八



弓の事
中庸子曰射有似于君子失諸正鵠
及求諸其身 孟子盡心上大匠不為拙工改廢繩墨
羿不為拙射變其彀率君子引而不發躍如也中道
而立能者從之

莊子田子方篇列御寇為伯昏無人射引之盈貫措杯
水其肘上發之適矢復沓方矢復寓當是時猶象人也
口義云引之盈貫用弓而至滿也前手直而肘平可以致
一盃水於其上言定也發射也適去也沓重也又也矢方
去而矢又在絃上沓於絃上者總去而方未也矢又寓於
絃上矣此言一箭接一箭如牝其神速也象人木偶人也
道と字より人 論語里仁篇朝聞道夕死可
矣このひ未文公勸学文勿謂今日不学而有來

日と云一り義に在る
一刹那 一彈指頃六十五刹那

牛と賣者あり買人明日そのあつひとやつとて
うとやうんとのふねのまみ牛死ぬらん
ある人利ありらんある人利ありらん
ある人ありも汝をわたりある人ありも牛あり
ぬ一減は換りらんある人ありも牛あり
生あるもの死はらんある人ありも牛あり
一も也人ありも牛あり一日の命を食ふ

おりの牛はあつひ鵝毛よりと控一萬金を
以て一銭と夫のん人換あつひつひつひつひつ
は商人のつてま理の牛はあつひつひつひつひつ
これ商人死にけりまは生か愛をへな命の
な日になりのまあらんやとあつひつひつひつ
とわきれてつひつひつひつひつひつひつひつ
は賊とまされあやうく他の財とむさわひつひつ
志満事なりつひつひつひつひつひつひつひつ
死にけりつひつひつひつひつひつひつひつひつ
生とまのつひつひつひつひつひつひつひつひつ
おそれあつひつひつひつひつひつひつひつひつ
りつひつひつひつひつひつひつひつひつひつ

んつひつひつひつひつひつひつひつひつひつ
牛つひつひつひつひつひつひつひつひつひつ
作賣畜至用谷量馬牛任氏力田畜入争取賤買
任氏独取賣善善橋兆致馬千匹牛倍々々

貨殖傳のつひつひつひつひつひつひつひつひつ
つひつひつひつひつひつひつひつひつひつひつ
偽つひつひつひつひつひつひつひつひつひつ
一日の命 大智度論曰設滿世界空無有直身
命 鵝毛よりつひつひつひつひつひつひつひつひつ
或重於太山或輕於鵝毛

死にいくまば 孟子告子篇生亦我所欲死亦我
所惡

生死相あるづるは 秋民の不生不滅と涅

槃と一生死即涅槃と云ふ根未だ悟憲のハ

識田中下河字一カ生死亦断涅槃亦断と云ふ

在子が死生大なる事あり事ありと云ふ

ハハ老ふは死而不亡者寿と云ふ是皆生死の

相あるづるづる理と云ふハハ 魚好グ例

の天を在老と好むるは有り

實の理と云ふハハ 玄義第一心名不生亦

後不滅心即實相 老子下士之道と云ふ

わらふものつるふなり

此段才と海よりある易の無妄卦と相

かゝるれども牛と云ふ物此と海より趣を相

かゝるれども牛と云ふ物此と海より趣を相

行人之得邑人災象曰行人得牛邑人災也

いふことありと云ふ人あり人のほける牛と

いいてる其邑と云ふ若ぬめりうらうらな

つまてうらうらなりやと云ふ災あり也牛の

災あり先妄の災象曰行人得牛邑人災也

いふことありと云ふ人あり人のほける牛と

いいてる其邑と云ふ若ぬめりうらうらな

つまてうらうらなりやと云ふ災あり也牛の

災あり先妄の災象曰行人得牛邑人災也

たふのらんを引きとて一まよ一後びひえ
ふも終ふ方とけりといひつゝ

めれのみつふもあつくりつらつらなるよとていふ人
ふも終ふ方とけりといひつゝ

めなもも
葉皆子和
名奈毛羨

和名集本草注云葉身一名羊負来

今俗も稀茶と

めなももあつくり其葉茶身は似つるゆ
るりつゝ茶身と蛇傷のあよはつるこも茶
よとてつゝり又天名精地菘鶴虱はこめな

もみよあり成いのあり茶もも号を鶴虱ハ
地菘の実也本草よ地菘と虫地はつゝり
而よわりのつゝり和名集りハ天名精とえ
ゆつゝかみとつゝりも別ありと名精
ハ則地菘あり

其物よつゝとて地と費つゝをこり物よんて
だあり力よ氣ありふよ鼠ありと因り賊あり
小人よ財あり君子に仁義あり僧よ法あり
小人よ財あり君子よ仁義あり

老子曰大道廢有仁義

俗儒ハ仁義と云ふ事也。つゝ人得て名
目を以てつゝと雖も、其のつゝし者もあつて、其の
在るのふふあつて、俗儒も仁義のほつゝ
一、聖人のあつて、仁義よりして、むをひん
仁義と行ふよあつて、すは善は、其のまゝに、
て、惻隠あり、射あり、履、
と、
生れは、
減り、
又と、
義ハ人の情よあつて、
思ふ、

善とて、
刑よ、
淫僻、
や、
な、
を、
海、
あ、
或本、
あり、
か、
め、

きうりらたひびくらの云置る年とあけて一
言芳秩うやあづけける菓子とらんゆいん
りあひして思ふ事ども

一 ちやまき〜せぢやあ〜海〜思ふ事ハ
たかやういせぬいふ也

一 後世と思ひん若ハ精法瓶一りのやうき
下也特経本尊ふつりきとよきものを

一 道世者ハちらふふとけ思やうとらふひ
こけ最とのやうにして也

一 上筋ハ下筋より智者の思ふにらり使人
を食ふ成法ある人の法も成るやなり

一 佛道を稱ぶるものふた別なりこれいし
ありあにかりて世の事とらふやうをぬとす
一 おのゝ

い介もあ〜もねん

精法瓶 ちんだいぬりみち也瓶ハつゆなり

精粒も精粒も奈太も出り沙石集り

大衆の徳正徳生要集とよまれらるゝ法然坊

春葉坊 馳つてれり付まふ坊奈方瓶

一川も執心とじま〜き〜也〜法然坊

中されらるゝ大衆僧正法法の威涙とをがさ

れりる〜ん又精進魚類物類にも精法れ

あり玉篇云精 息藏反以米 糝 古摺 糝

和義也 糝 文摺 糝

よりのみならずもきこむるなり 適世者よ

くさくさぞ儒家をきんものもはたして知ぐ

謝上蔡五經の要訣とあつめて冊子く

明道よえとられん玩物喪志といはれてお体

より汗とあぐり入るに視と秘苑けり

終よ冊子も然もあつてそそなり二程全

書よんくさくさなりんとして愚衣愚食と

くつゆくさくさなりんとして愚衣愚食と

上福々 福ハ出家する若發とさると授戒

してより一其九句の勤行なりと鴨と僧鴨

戒鴨也僧の位ハ戒鴨の前後よりて次

なり也是より事ハ次なりと鴨次なり

職京ハ極鴨とありも位階の名也然もハ

上鴨下鴨ハ上位下位といふんがこ

智者ハ愚者よりなり 史記老子曰君子盛徳

容貌若愚 荀子曰孔子曰聰明聖知守之以愚切

被天下守之以謙勇力撫世守之以怯富有四海

守之以謙此所謂挹而損之道也

通鑑曰論語曾子曰以能問於不能以多問於寡

有若無實若虛犯而不校昔者吾友嘗從事於斯

矣唐太宗問社義於給事中孔穎達具狀其義以

對且曰非独也夫如是帝王内蘊神明外當玄默

若位居尊極炫耀聰明以方凌人飾非拒諫則下

情不通取亡道也

佛道と稱ふ 禪家に放下著といふは
前章とあげたるなり
は外とあり

孟子万章下 孟献子有友五人焉 樂正裘牧仲
其三人則予忘之矣

堀河相國ハ義賢ハたれし人としてその
なぐさ差とこのみけりり一子基俊ハと大理に
りして雁務ハたれりし雁屋ハ廣櫃と
ありてめざりし作と改りしは
けりしハ廣櫃ハ上たより傳りて
致百年とつり果代の公卿ハ弊とあり

親撰と云ふや
實ハ法官等ハ
堀河相國 基俊ハ
さ差 たるは義也

大理 職原曰檢非違使
天長年中初置之異朝ハ重ハ職昔唐虞代
陶為士也云大理周礼立官ハ日大司寇即
後代置大理寺本朝又以刑部省為
年中准唐朝置使廳蓋是大理寺也但別當以下
為宣下職為衛府人補
別當一人 唐名大理卿 參議已上ハ
之人必帶衛門兵衛督世俗說補大理之人可備七德

所謂譜第器量才幹有識近習容儀富有

廳務 廳ハ換非違使ハ政とくく也廳の字

と海んごりつと決り

廳屋ハ唐櫃

許狀文書あくと代々入金扱

ありて和名ハ韓櫃とあり

めぞとく作り うちとくく結構ハ決り

規模

規矩模範あり

は欣つとく作り 作り器とありてあり

なつたりける所 関子書旧貫とありてあり

何ぞ誤りも改め作りんとひかれ孔子

もと何れあり

久我相國はなとく水とありてあり小豆反司

出器とありてあり海がりをありてあり

まがりてありてあり

久我相國 雅実公也

出器とありてありてありてあり

てよ身とありてありてありてあり

何れハ馬とありてあり

史記 晋世家曰重耳過衛去過五鹿飢而後野入

乞食野人盛土器中進重耳怒趙襄曰土者有
土也君其拜受之

まがり也足素然云教と定時と八海と

と云也者八位五位六位殿上に日教の教

食とてこれと教と人々云物夕臺盤と看

を行ふと日給と云と云と云と云と云と

云簡と云と置りも仕事ありは皆は當時の

教と人の名代悉記あり也内づりの字銃の字

なりと云と長味子思つと云と云と云と

巻よ玉銃と云と云と云と云と云と云と

壹玉瓶とあれば急良もト都急後も銃ハ

けりなりやあり和名集金枕日本靈

異記云其器皆銃俗云賀奈方利今按銃字所出未詳
古語謂銃為磨利宜用金枕二字也

枕即益字

まりと云と云と云と云と云と云と

成就と貝と云と云と云と云と云と

奥列を田舎と云と云と云と云と

或人任大臣節令の内辨とつとあ所也なり
内記ののりつと宣令と云と云と云と
とけつと責はまると云と云と云と
厚くはもあつと云と云と云と云と

中_ニ為_レ瘧鬼_ハ一居_テ若水_ニ為_レ罔兩_ハ蜜鬼_ハ一居_テ入_レ宮室_ニ巴_ハ隅_ニ中_ニ
善_ク驚_ク小兒_ヲ為_レ小鬼_ト於是_ニ以_テ歲_ノ十二月_ニ命_シ祀_ス官_ニ時_ニ儺_ヲ以_テ索_ヲ
室_中而_カ駈_レ疫鬼_ヲ焉_{東海}度_索山_有神_茶樹_鬱壘_ニ神_以
禦_キ凶_鬼為_レ民_除害_因制_ス駈_儺之_神季_冬先_臘一_日大_儺
謂_フ之_疫 呂_氏春_秋云_前歲_一日_擊鼓_駈疫_癘
鬼_謂之_害除_亦曰_儺

洞_流の_左大_石

實_泰公_又号_ス海_山本_ト

次_方を_尸流_レれ

追_儺之_行小_次也

又_立郎_男

侍_士 海_門兵_部の_被宿_大と_ス物_也

軾_名目_抄の_橋実_と云_り小_半墨_れう_寸

危_りなり_和名_の軾_を車_前なり_と云_れ

炎_みを_下あり_然い_ひど_つき_と云_ふ物_がう_す
大_多と_てき_あら_うひ_らら_が 又_うた_りの_とお_しれ
白_く大_のよ_りい_りえ_ひり_の消_つ物_と一_を思_ふ
和_名の_助鋪_と云_てこ_やも_ひこ_やも_流り
如_清士_屋也

大_光寺_殿と_て習_人ども_あら_うと_作ら_せる_れ
う_りち_らく_と 忠_守あり_らら_うら_らふ_物は
大_酒言_の明_々我_知り_若も_もん_んぬ_忠也_うれ_と
あ_らう_くと_云れ_たけ_らと_廣瓶_子と_云て_わら_ひ
あ_られ_た色_のは_けら_らと_云て_匠も_うけ_らし

大足ちる飯

ほろ多後也

くまろ忠守

丹家康頼十一世忠守典藥頭

内院昇殿哥人正四位下

公明 侍従ハ兼官也 正親町三條庶流也

かろ瓶子 謎の字有り玉篇謎 米部切

さきやうのふら吉物のみのみあはぬハ唐也忠盛

ハ平氏也耶ろ瓶子也瓶子平氏声相通より祭

平家物語おもむ節の阿保坊のつらむらぐの

ありともやろ麻谷は會合にもあつたも

たりやのどのくびとろりかどあつた凡謎あま目

ずよびろりともいひぬろり俗流よまろり

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

ろりとろりつろろろろろろろろろろろろろろろろ

宋陳亞自為詛字謎曰若教有口便啞且要無心為魚
中間全沒壯勝外面任生稜角又荆公作詩謎云佳人

ある人ありひねんをいめる人何人ぞや
人のうらむとははた小娘終つる也
又魚好が
自託ありや

こころあざげなる かせぐらげなる也

傲りもあつぬやひ 常におうらむ人の

とだめころ句ひあり

門よりあつてよ 女房よりおわねよひける

河也

雨もどなる 雨もあつせうすらんま也

こよひづやとだつぬらなる ことひんおれ

くねぬよるなりとまて 池たぬまらぬ也

秋ありとも 秋ありともなやうく 書物

鳴りあり

はたなとも 秋のまらぬま也

ひらあつう 鳴らぬるん也 赤餅賦 東方

くわあつあり

枝はまのまきなるが 今まあどとぬり跡あま

と何のまとおひめて 柱のまのぬあまて

とてくるぬり跡ふ也 菅家秋よあつすむ

やの精とぬらくはあつてまふなりや

おの屋うき小消のうらむは雪のつらうにありまふ
ゆきよきしぬ車はなぐらも霜つらうにありまふ

ちの月をわらわれもくはなはぬふ人か
けりいさぎの廊よなましくめをわくぞくみゆり
男女こなまきよふりうをそ抱こりするもえ
何事よあらんほよまきよたれうがうら
おどいしよしよんてえもいよぬまわひのさ
しうわりのほこりおりたれをひなごいつ
れくまいしよもゆり

はげも若殿と目く艶小やいしよんはな
りやうられもくぬあふあふぬ月ひぬるれど
も若殿おどまてくくく見ゆりなり
あみくふいあふいやあふり祠也あふなり
なまきよなまきうもて長押上下あり承塵

いもちりくはしてハトおあけしよ氏々
あまきよももえれあうきよあり
つきよあふたれ 洞よおきよしよん也
ふいしより 女のしよつさもみさうしよん也
たのおけい優なり神枕草紙流氏おどわら
もうげあり

方御権室上人 束のわりくあよわそたそ馬よ
あふ女の前あひしよりりがほひさきか男あ
くしよそを燈おるを堀おしよてがかり燈いしよ
あしよしよめてこハ希あはれ狼藉うれ四款の青あ

うとられし又あさきうとた事しまたうとたるうりに
いひ出はれあうとたうりうとたわら事ハ男は智恵も
うとたうとたうりうとたわら事跡よりあうりうとた
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より
あうりうとたわら事跡よりあうりうとたわら事跡より

あれらる女房 ざれらる女也
堀川の内大臣 トモ 具守公也号岩倉内大臣

堀河流正天納言 岩倉内大臣正二
通具 トモトモ 具實 トモサ子
基具 トモ 具守 トモ
堀川大臣 従一右大将
いしとく

浄土寺の前関白 九條殿師教公号巴心院又号
浄土寺元應二年六月七日薨四十四歳
安部つ俊 後堀川院女御 浄土寺大政入道
公房公女也
山階の左大臣 實雄實氏公の弟西園寺
一家洞院
ふく入よとちうあ女 是より一掃し女
ねんのひがめお事と云
人我の桐あう

薩乘法教云般若四相

我相	執取自体
人相	数取餘趣
衆生相	種々変異相續
壽者相	一報命根不断

寸法おしじ人れこれよくあれるがとうりなる
 うとありあしとせしうり人のいあよしと一錢り
 わしとつても是とうりぬれまづ一家人とこ
 める人ともはこれ商人の二錢をわしむん切也
 刹那のゆきとつてもあれははこびてやまら
 れハ私と遊り約忽よりつたれを人ハとん

日月と宿へははをとれ一念ひかゝるを
 事とれしむて一人まうそ我教あはの必
 夫つるべしと若あうせしんよきふのくはあ
 ひと何事とつたの何事とついままん我ハ
 がいむる々の日めんぞとつ節よととん
 一日のうらよ飲食便利睡眠言語行歩やじ事と
 んはしとおぬくの何とういふまのまらあはい
 くとくまらぬらよ元益のこしとれを益事
 としひや益のしと思惟して何と移すのあり
 ば日と清し月と白て一生を送るむとらうり
 謝靈運ハ法華の華受なりしうりもん常よ
 風雲はも風観ぞしうハ息を白蓮の文とゆらう

山澤に遊從者數百人伐木開徑百姓驚擾或表其
有異志靈運詣闕自陳上以為險川內史靈運遊放
自若為有司所糾遣使收之靈運執使者真兵逃
逸韓亡子房奮秦帝魯連耻追討擒之上愛其
才降死徙廣陵已而棄市

三休詩黃滔遊東林寺詩翻譯如曾見白蓮開滿

池註庐山記謝靈運即東林翻涅槃經曰鑿臺植

蓮池中詩意謂見白蓮猶見靈運

正法華添品法華芬陀梨法華妙法華如也

のひしてひなはの翻譯あれども靈運が名にあは

り巻も吳運法華の執筆なりといふれど

り巻も巻好りといふの人の合はれもあはるべし

今世も行りり妙法華の晋の羅什の翻譯

て其の僧睿が筆受なり天竺梵經と唐土

して通事するは翻譯といふれと唐字より

流るるを筆受と云涅槃經ハ吳運が筆受也

淨土宗は了譽が直譯の才九の惠遠法師衆と

あつた四十八日念佛と行を測明靈運其流

まじりつらんといふ測明のハはなり吳運と

ゆがふ人々あやうして測明の酒とたりとあり

放逸なり雪運ハ有翁精進の人なり何そかも

といふこま瓜のれざりといふ巻を次と作てい

雪運不入心雜起故測明競引心專一故とい

吳運も法華執筆は若かり雜起ふありと餘

行と修をりときくふあり

高僧傳晉惠遠見廬山清靜足以息心始住龍泉
精舍刺史桓伊乃為遠於山東立房殿即東林也絕
塵清勝之實並不期而至彭城劉遺民豫章雷次
宗廬山周續之新蔡畢穎之南陽宗炳等凡百有
二十三人並棄世遺榮依遠遊止 廬山記遠法師
居廬阜三十餘年影不出山跡不入俗送客過虎溪
虎輒鳴號昔陶元亮居栗里山南陸脩靜亦有道之士
遠師嘗送社二人与沿道合不覺過之因相与大笑今
世傳三笑圖

亮訪遠公聞鐘有省攢眉而去
事文類聚前集云謝靈運未入淨社遠師以心難止
范甯在豫章遠師請入社范不往

廬阜雜記遠師結白蓮社以書招淵明陶曰弟子
性嗜酒若許飲即往矣遠許之遂造焉因勉令入社
陶攢眉而去

嵩冲靈抄書記謝靈運欲入遠公社遠公拒之曰子
髮續而鬚羨面与身戾非令終相請多行陰德
戒飭三年而後可靈運怒曰學道在心安以貌耶
遠笑而不答後靈運果如遠所料盧循反遠与
之执手言笑知人鑑何明於靈運而暗於循如
此耶 黃子耕題謝靈運墓詩曰心難難為蓮

浅アサキよりあつきよりのべも也 欣赏キンシヤウ全編ゼンペンの中ナカ華カ
并ナラヒ四夷シイの双陸スクロクを載ノセりり主ヌ伴トナリ日本ニッポン國クニの
双陸スクロクともあぢて固ツツ説セツとあるなり

因イ基ゴ双スクロク六ロク好コトシてあり〜くす人ヒトハ四シ字ジ入ニ送キヤウも海
内ウチノも思オモ事コトとせ思オモふとあるひび〜の〜
事コト耳ミミにや〜りていみ〜くおぼ〜り

因イ基ゴ 博物志ボツブツシ堯ヤウ造ゾウ因イ基ゴ以テ教ケテ子コ丹タン朱シュ或ニ云ク舜シユン以テ
子コ商シヤウ均クン愚ウ故コト作シテ因イ基ゴ以テ教ケテ之ノ其ノ法ホウ非ズ智チ不レ能ズ也
論語ロンゴ陽貨篇ヤウカヘン飽食ホウシツ終日シュウジツ無所用ムソウヨウ心難シンナン矣哉イカ不有ム博
奕ハク者シヤ乎ヤ為ス之ノ猶ナラバ賢ケン乎ヤ已ニ 孟子マンシ博奕ハク好飲酒コウイン不
顧コト父母フボ之ノ養ヤウ二不孝ニフコウ也

四シ重ジュウ罪サイ 四シ重ジュウハハ戒カイの内ノ飲酒インシユと除ノケて殺コロ盜タク姦ケン妄マダシ
と云ク律リツハ波羅夷ハハライ罪サイと云ク唐タウハ斬頭ツツカサ罪サイと云ク也
人ヒトの法ホウと云クもハ母ハハハ生ナマと云クもハ〜と云クハ四重シジュウ罪サイ
と云クハ懺悔サンケ〜ても滅メツせざり也
五逆ゴギャク罪サイハ 殺父コロシチ殺母コロシハハ殺阿羅漢コロシアロカン破和合僧ハカワセソウ出佛身デツツツシ
血ケツ

うれ因イ基ゴは道ミチハ堯舜ヤウシユンの対タイよりあり〜い〜
まど〜あ〜〜あ〜び〜れ〜陰象山インシヤウサンが因イ基ゴ
と云クて河圖カトの教ケウりり〜の〜ハ無智ムチ者シヤれ〜
〜〜〜〜〜やうに〜〜〜〜〜胡コ且キが
やま〜た〜〜れハ聡明ソウメイなり者シヤも〜〜〜
事コト〜〜〜ハト思オモハ人ヒトもよ〜〜あり〜

日くられらるる途

史記伍子胥掘楚平王墓

出其尸鞭之三百曰吾日暮塗遠吾故倒行而逆施之註子胥言心在彼離常恐且死不遂本心今幸而報豈論道理乎譬如人行前途尚遠而日勢已暮故其在顛倒疾行逆理施事何得冀吾順理乎 史記主父偃曰吾日暮途遠故倒行暴施

蹉跎 韓文鳥乎吾意其蹉跎註曰不遂其意

韻會蹉跎失時也一曰跌也 異本小蹉跎とる非

かり

信をとも思ひて礼義をもちり

莊子盜跖篇比干剖心子胥抉眼忠之禍也直躬證

父尾生溺死信之患也鮑子立乾勝子不自理廣之害也孔子不見母匡子不見父義之失也此上世之所傳下世之所誥以為士者正其言必其行故服其殃離其患也

此以爲好か好しは佛光の餘海也彼信とて

小節とて礼義とて末事とてその好より

大事は根幹の法縁とすて世俗

は毀譽をんかかるとも儒者たるも

尾生がこころなる信とて君子の諒あり

と云大人の言必信ありて非礼の礼非義の

義とて信とてそれの名小あつて跡小かり

て愛と通ぢぬ愚人といふゆゑにりてるれ如

楳植上卷之七者自文政十丁亥十月十四日
起筆同月十七日夜於燈下畢之

中村直衛

今出河村にわたるの夜、蟻織の如く、一々たるを物河の
より、水が流るる所、をさし、五九、以半を、
より、これ、あり、き、水、前、板、ま、を、け、と、わ、り、け、る
と、お、り、車、の、あ、り、よ、ひ、り、が、希、有、の、童、う、れ、
る、所、を、以、半、と、い、ふ、物、と、い、ひ、り、を、れ、を、お、り、
度、御、氣、文、あ、く、な、り、と、ま、の、れ、車、や、い、じ、り、
五、九、よ、し、ゆ、ら、り、と、え、あ、く、と、あ、ま、は、男、也、と、い、
車、に、頭、と、う、り、あ、て、る、色、を、り、こ、お、る、名、は、け、い、五
九、右、春、の、男、料、の、以、半、銅、が、か、い、右、春、あ、ま、
ゆ、り、た、た、女、房、は、あ、ま、も、一、人、を、ひ、と、ら、り、一、人、を、あ、ま、
つ、り、一、人、を、ふ、り、と、一、人、を、と、ら、り、と、つ、せ、ら、れ、り、
と、お、河、の、程、や、い、の、菊、亭、兼、季、公、也、西、園、寺

太政大臣實兼三男也

有栖川 秋枕云有巢川 本院邊ありや

つよよおのちのちを河ねとてりよぞかけの巻

つよ京極前右二條大皇太子父賀茂のつよとてり

つよ太政大臣つよ河洗とて松竹映水とてふとて讀みよ

なん又云君ゆさぬみそちあはれてありを川い

むとてりよとてりよつよはか哉 西行法師 右河洗あり

とてりよて本院のまへとてりよとてりよとてりよ

とてりよとてりよとてりよとてりよとてりよ

一葉抄云伊勢の河洗の即宮ハ嵯峨のむを河

あり加賀茂の河洗の即宮ハ紫野よとて

ありささ水 足つきのあり也

太秦殿 信清公也号坊門又号太秦内府開白

道隆公の後也

女房名もも とも義未詳

凡人抱れ名よとて義とてりよとてりよとてりよ

とてりよとてりよとてりよとてりよとてりよ

りよ魚とてりよとてりよ餅とてりよとてりよ

かゝりよとてりよとてりよとてりよとてりよ

れハ齧缺王倪被衣意而子ハ教志ひて解釈とす

又佛經ハ不鬪の梵語ありとてりよとてりよ

の名ハ胡語多ク鉄木真と成吉思のひ達魯

花赤窩崗台弘吉刺速不臺奧都刺合蛮夫烈

門必烈兀良哈多阿藍答兒阿里不哥ハ合思ハ

不曾花阿合馬阿里海牙るんど云は類あげてくるを
あづうだ蒙右の音あれたもそは字なきゆへは
中華の音はちうさ物と云りてうは名字と云日
本ととも上右津代の同は類を多し山八人の
口より出さるべと天と天とあつげ地と地とあつ
くはの理自然なり自然の音あれた則自然の
言語ありと知る一文字のあつてると云うしとこ
しくあつたも母ありて又子と云うしはふ十言万語
とる也を法信流小流り一あるもの名と云ん
ようんりく像と云くかんようはのんといふ
事と變と号とと一ひはたり
すうり

宿河原といふとあつてなつてあつて
九品の念佛とせりみおよと入ありなつてあつ
は四中小いあつて一房とせりやありと云ふ
たれは中よつといつたあつたかくの終ふは終と云
まはあつて梵字とせり者也をばまが師あつて
中一入東國といつてとせりはつてと云ふ
たつとあつてと云ふ人よあつて恨まらぬと云
りひてあつてと云ふと云ふと云ふと云ふ
とらと云ふ事ゆりもあつてあつてと云ふ
をけがゆりもあつてあつてと云ふと云ふ
しこわきあつてと云ふと云ふと云ふと云ふ
はつてと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

て二人河東(カ)のひしくん行(カ)なりふつゝぬあひして
去(カ)りた(カ)りしう(カ)なりつゝいふもの者(カ)ありける
よやと世(カ)小(カ)は(カ)らん(カ)梵(カ)字(カ)漢(カ)字(カ)あ(カ)ど(カ)ま(カ)け(カ)り(カ)者(カ)と
は(カ)ど(カ)め(カ)也(カ)け(カ)り(カ)と(カ)も(カ)や(カ)世(カ)と(カ)す(カ)る(カ)ゆ(カ)も(カ)似(カ)て(カ)執(カ)執(カ)ふ(カ)く
佛(カ)道(カ)と(カ)稱(カ)ぶ(カ)ふ(カ)も(カ)似(カ)て(カ)剛(カ)健(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)放(カ)逸(カ)无(カ)慙(カ)は
あ(カ)ら(カ)ぬ(カ)れ(カ)ど(カ)も(カ)死(カ)と(カ)輕(カ)く(カ)して(カ)少(カ)も(カ)な(カ)ら(カ)ず(カ)は(カ)り(カ)か(カ)る
の(カ)い(カ)さ(カ)よ(カ)く(カ)老(カ)して(カ)人(カ)の(カ)わ(カ)ら(カ)ず(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)な(カ)ら(カ)ず(カ)け
り(カ)也(カ)

宿(カ)河(カ)東(カ) 折(カ)は(カ)圓(カ)小(カ)あり

や(カ)り(カ)く(カ) 暮(カ)露(カ)と(カ)書(カ)る(カ)の(カ)ど(カ)も(カ)梵(カ)論(カ)と(カ)ま(カ)ど
也(カ)梵(カ)字(カ)漢(カ)字(カ)あ(カ)ど(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)あ(カ)れ(カ)が(カ)也(カ)や(カ)り(カ)く(カ)は
單(カ)紙(カ)一(カ)を(カ)あ(カ)り(カ)虚(カ)空(カ)坊(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)もの(カ)は(カ)長(カ)七(カ)尺

一(カ)守(カ)力(カ)強(カ)し(カ)え(カ)う(カ)も(カ)か(カ)ら(カ)ず(カ)ぬ(カ)小(カ)一(カ)人(カ)守(カ)持(カ)を(カ)力(カ)と
ら(カ)き(カ)ひ(カ)り(カ)ま(カ)も(カ)の(カ)八(カ)角(カ)棒(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)一(カ)人(カ)守(カ)れ
高(カ)履(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)髪(カ)を(カ)色(カ)思(カ)く(カ)して(カ)や(カ)り(カ)と(カ)書(カ)る
よ(カ)なり(カ)一人(カ)の(カ)義(カ)女(カ)と(カ)妻(カ)と(カ)同(カ)行(カ)と(カ)十(カ)人(カ)法(カ)國
と(カ)あ(カ)り(カ)く(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)は(カ)る(カ)舊(カ)佛(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)もの(カ)偽(カ)
も(カ)も(カ)ら(カ)ず(カ)俗(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)山(カ)伏(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)刀(カ)杖
は(カ)一(カ)尺(カ)と(カ)吹(カ)せ(カ)る(カ)に(カ)ひ(カ)り(カ)と(カ)は(カ)ひ(カ)道(カ)路(カ)と
あり(カ)き(カ)人(カ)は(カ)門(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)物(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)い(カ)ふ(カ)が
わ(カ)く(カ)は(カ)流(カ)也(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)い(カ)ふ(カ)も
は(カ)辰(カ)が(カ)り(カ)く(カ)は(カ)世(カ)と(カ)す(カ)る(カ)佛(カ)道(カ)と(カ)稱(カ)ぶ(カ)や(カ)り
を(カ)れ(カ)ど(カ)も(カ)執(カ)執(カ)ふ(カ)剛(カ)健(カ)と(カ)い(カ)ふ(カ)も(カ)は(カ)ら(カ)ず(カ)は(カ)ら(カ)ず
滅(カ)よ(カ)そ(カ)は(カ)口(カ)と(カ)綱(カ)ひ(カ)あ(カ)り(カ)と(カ)朝(カ)よ(カ)錢(カ)と(カ)い(カ)

暮又一瀆とわさじの町人なり一且瀆死をりこ
と瓜のしもねのしぬあゝ閑津とあのみて死
賊の火よ入がさし一仁道と修するともあわれ
ど其弊め此ふありこも世教のこめとあはる
ひがことよりたしきりされどわりこが其師の
ふみ小仇とむくひて死を扶くするこもあはる
うさことあはがこもりるは死れわち世の人お
君文持仇とあも武まのひくさきあまどあげ
う一ねんがりこのもさぬくねらまらう

寺院は號りぬ前は物も名とはくる事じ

う一人ハすこも求だたごありのまこりやとく
付ける也は法とあう案一才是とありのさせ
とあさりあうふきこゆるいこむつ一人の名もあれ
ぬ文字とつらむくする益の事なる何事も
わづこしたとどりのめ異況あはむは後才の人
のめさあは事ありとた

なとすりまわりき者七ありこ一はさるこあんと
あま人二ありわりよ入らあまを病をくもつる人
四一を酒とぬ人五一はけ一男は共つはは虚言する
人七にを歌あつる人よきあありつ一あり物と結友

二めはくはく〜二めは智恵ある女

は良朋友よ若衆ある事といふ海語よ益者二交
柳花二交とありては川よりさくやむとさき
人ハ上交されば必請ふ事ありて萬年友と問付
小長貴と揆んで友たりとていつつとて血
氣ありんるり故よ松放翁が廿年豪英は交ハ同
参の夜雨よあつてはこつとて病かき力
つゝ他人ハ空異とせられぬ又飲食とも忘るる
故よ他人とてりこつとて我も我もたおそく益
寒湯が多病故人跡〜とて〜とて酒と
このいハ事おされとて〜とて解事出来
出り重〜とて〜とて〜とて兵ハ一朝のいり

小方とてとてとて父母の愛とあり〜暴虎憑河
の梅とあり〜虚言とる人ハ弟事とつとて
ぞ朋友信ありハ丸倫は常也歎あり故人ハ久〜
睦び〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて
とと醜の〜とて〜とて海語にも放利而行
多怨と〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて
よきこのの瓜〜とて〜とて友車馬輕装〜とて
やあつ〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて
あ〜とて〜とて〜とて東坡山谷ハ庵安常
と〜とて〜とて〜とて〜とて〜とて
つと兵幼清は戴同甫と志はた歎す〜とて
智恵のゆなとて童蒙の求〜とて〜とて

講齋湯泊のむらけあり

鯉はあつもの食ふ魚日は鱸うもをとりん膠ふ
もはく物なれば縁ざりさるものよさう鯉はうり
こそ御和まともきさう向く物なればやしごとくあり魚
なりちるふは雉ゆなうも物也雉松芽のむらけ
湯飯のよふかりさる家若さうもてま介公さ
事也中宮は方お湯飯の上のう病え棚は鷹
はるつれをゆふ入る後の出使下してゆきさへ
やうそは又みてもやうは物はれさうもあては棚ふ
わていさ事なるさうびさあめさうも也さう

さうさうのさうさうのぬのさうさうさうさう
けり

鯉は義食より目を養うる也

魚と膠小福をと鯉さうの瑣碎録は鯉魚膠と
墨は磨て方おせはま墨さうしてあてさう
ありさうと周詩は魚鱸膾鯉といひ豈其食
魚必河之鯉と云魯は若さう孔子は鯉魚を贈
ともあり鯉魚とやんとあり物とさうはさう
佳魚なり

雉儀礼相見之贄各執雉大夫執鴈注雉取其守
介不失節鴈取其候時而行也昏礼納采用鴈

鎌倉は海よりつとよき魚はぬりひめはりなま
ゆきてははりのそりひりのせうに鎌倉は身より
のしゆりまは魚とのれりわうらうらう世にま
はりくく一人のあつてはるりゆらうらうは下
部もくろせきらうそをせりゆらうのせもきくや
うは物と世のおよわれをよきゆらうも入らわら
みりうゆき

鯉カサガと云字本草綱目類書等分明なり
海篇心鏡は鯉音堅大鯛也とあり萬葉集中九
水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣於及七日と云つ
又式部大輔石上堅魚朝臣と一人のあつて同
小のまがり倭名集にも鯉魚カサガとあり対ハ鯉

とも堅魚とも云なり物とハ昔よりと名をなれ
魚也又ハ魚と云りてめて調味の料と云り本
も久しき事なりと魚好が時代よき人など
のせとて食とてあやうけりる也
九堅魚のふあつてはり食てと食ぬ物
あり者食りてと食もあり者ありて今
あはれありきりて今あはれあり又出
地よよりて有るありびりも今もあつて中江
ありり物もあり時代よきとて用捨あり草木
鳥獸萬物小のあつて皆かくれり

唐の物を藥の介はななくとも事かきも一と云はなは
國に何れもひらきもせむもいふもいふもいふもいふも
一舟の多やそくぬ道よ金用の物もものみりつみ
て何れもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
せむも又得るた貨とたうとあむもいと文も
ゆきとるや

唐の物は茶の介

龍腦麝香斗英やどく教日

中よあは物也人參もと代を朝鮮より未貞也
延壽式典藥寮よ人參も日本諸國にお産り
性こありとるもいふもいふもいふもいふもいふも
そい日本よれ
あむもいふ 傳教大師ハ一切松とく書寫され

より兼好もあむもいふもいふもいふもいふもいふも
ども中華の書ども本物よいふもいふもいふもいふも
又代よは名儒秀才の撰集文章たどあは
なれいふもいふもいふもいふもいふもいふも

唐船の

尚書盤庚篇若衆舟汝弗濟臭歎

載

唐玄宗開元二年胡人上言海南多珠翠奇宝因言
市舶之利又欲往師子國求靈藥擊地土命楊範臣往
求之範臣奏曰彼市舶与高賈爭利殆非王者之体胡
茶之性中國多不能知况於胡椒豈宜實之宮掖社胡
人眩惑求媚無益聖德上從之通鑑

遠き物で室とをん

尚書旅獒篇不室遠

物則遠人格

老子經曰不貴難得之貨使民不為盜

夫ひうものあ馬牛はあはるるあひりこをひつま
しこれどなくてこれぬものあれはいうをせん大は
すのりこふそくはあ人も備らるるこれあま
さきとあまにああるひたなれ物文もあめか
りぞあまねんあ外の鳥獸すべく用をらるもの
なりを自然に格とあるるさうりさうり色飛るひ
翅とさうりあま入られて雲とさうひ野山と思ふ

然止可なりと思我力あさうりてあさうりてあ
うん人もとこのさまんやせと若りて用ひ
うらさうりしりあ禁付がら也王子猷がも狐裘
を一林にたのめとみて道遠のなうりさ
うりさうりさうりあうりさうりさうりあ
さうりあうりさうりさうりさうりさうり

夫ひうもの 周礼六畜注獸可畜者六畧牛
馬羊犬豕雞養之曰畧用之曰牲又云在野曰獸
在家曰畜々々畧同許救反

莊子秋水篇何謂天何謂人曰牛馬四足是謂天落馬
首穿牛鼻是謂人郭象注曰人可不服牛乘馬乎服牛
乘馬可不穿絡之乎牛馬不辭穿絡者天命之固當

也苟當乎天命則雖寄之人事而本在乎天也希逸
口義云牛馬四足得於天自然者不絡不穿將無所用此
便是人心一段事

犬ハシのりのりとあせく

金樓子陶犬無守夜之警尾

雞無司晨之益 東坡云養猫以捕鼠不可以無鼠而
養不捕之猫畜犬以防盜不可以無盜而畜不吠之犬

家ゴのある也なれ

孟子雞鳴狗吠相聞而達

乎四境

老子云鄰國相望雞犬之音相聞

走シの獸々

莊子天地篇因可以為得乎則鳩鴉之在

於籠亦可以得矣在罾繳之中而自以為得則是罪人

文臂歷指而虎豹在於囊檻亦可以為得矣

司馬遷報任少卿書曰猛虎在深山百獸震恐及其在

檻穽之中搖尾而求食

東坡詩三云鳥囚不忘飛馬繫常念馳

牛と若めて

夏律ハツが無道すして百姓とあり

妹イモが愛して瑤臺とあり牛飲たりと見て

よろこひ虞竜逢と殺そ又殷紂が姐と寵し

婦人の云くるさかひ鹿臺鉅橋と決りて

トは賊とあはれ狗馬奇物と宮室よみちりと死

酒池肉林とはりて長流は飲てれ尉斗

炮烙刑と行ひて人氏とやこころ一物は汚れ

睡ときり潰人の心とりよとれめれ如女といて

其胎肉とるる是とれ生とる向めて目とより

ころ一つり也果して集討力をちびて國家とあらふ

弓射馬乘事 周礼注礼樂射御書數謂之六藝
五射一白矢二參連三剡注四襄尺五并儀 五御
鳴和鸞鳥逐水曲過君表舞交衢逐禽尤
六藝 一吉凶軍賓嘉五礼 二雲門咸池大磬大夏
大濩大武 六樂 三五射在上 四五御在上 五象形指事
會意諧声轉注假借六書六方田粟布衰分少廣商
功均輸盈朒方程句股九數

數 周礼注疏小学纂疏より
食ハ人の天あり 帝範務農篇夫食為人天農
為政本倉廩實則知礼節衣食乏則忘廉耻
史記鄴食其傳云王者以民人為天而民人以食為天

索隱曰出管子 論語大全より治と曰く天者人
資而生者也

卿黨篇より聖人飲食の品節を考へて周禮
儀礼禮記より膳羞の事を詳しきに減
飲食の味を考へてよく調り対を考へつゝは
口入病を考へて口に腹と怒り考へて易
牙が溜渾のありを考へてありともう
子と烹飪考へて考へて國のみを考へて
も出来たり
次より細工 唐虞の代より垂たる人百工の
事と司考へて周礼の考工記とのせとも考へ
の器と考へて法と記すは世の細工と考へ

多しとてはるる事は拙くぬと云或は書くも或は
樂器と作るもあり

多能を君子は能くは也 論語子罕篇太宰問

子貢曰夫子聖者与何其多能也子貢曰固天縱之將

聖又多能也子聞之曰大宰知我乎吾少也賤故多能

鄙事君子多乎哉不多也

詩云巧カクは絲竹シシクは妙なりは 文選十六

思舊賦序稽康博綜技藝於絲竹特妙

函玄は道 八雲抄和方は函玄辨あり

以欣詩云管絃とんて今の世と活能くと云

とんて礼義とんてあり貫之が方は親人の身小

ちりりとのどうれいと代の事也と云世の義

函玄也深遠なりとて昔々志なる人にとり

すして音樂の道律呂の調いりく人の身よ

と云一伊のんぐ人のん威動して吾もその

法世の風よいつしめんや子游武城と活り

礼樂と用ふ孔子は秋の聲とて割鶏馬用

牛刀と云武城は小邑也大國と活り法と用り

り及つすも也兼好が今世の活り糸竹と金鉄

のさかありとつる牛刀は人のあふあやらさど

礼樂のさあり人のふり人に在るあれたんよ

在るなりよく用り物に今の樂も古の樂の正し

活りも又あるのさかありとよく行へば形あり

活りも又あるのさかありとよく行へば形あり

いん風紙神一俗とく人車日とらうて
ふつ屋一はゆふ子湯が道とさへハ君子人
を衆一小人ハけりひやと一のふと孔子
て才力の詞とらうて一戯れまかりとらひり

世益のこ紙をて時と移ととらりる人
僻事する人とも云て一國のたの君のこあよ止こ
と紙紙とてさる紙會と事おや一まあまりの胸
幾なりとせりつて一人のりよ止ととらひりて
いとさふにゆて了食物中よまきりものやとに疾
る不也人間あり大事はらよとらひりて饑と空のど

風雨とらうて紙とて用とらとて樂とまをさじ
人皆病あり病とらうて色ぬれハ共然とらひり
着瘡とらひりる一紙茶紙とらて四の事求は
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
この外とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

又一食也 驚座新書云居服食三等湯東谷語人
曰学者居中等屋衣下等衣食上等食何者茅茨土
階非今所宜凡屋八九間僅蔵圖書足矣故曰中等
屋衣不必綾羅錦練也夏葛冬布僅適寒暑足矣
故曰下等食至於飲食則當遠求名勝之物山珍海
錯名茶法酒物々備庶不為凡流俗士故曰上等食

庄あり蟬の樹陰と豪して蟬の身りとあり
す蟬を蟬とらんそ異鶴の逐ありとあり
うす鶴を蟬とらんそ異鶴の逐ありとあり
ありそ庄あり鶴とらんそ異鶴の逐ありとあり
棘ありありありありありありありありありあり

ほくちの角さいまりてあつれくありいじん
きんふのひてはうつてあつれくありいじん
つき時のつれあるとあつれくありいじん
びくりとつれあるとあつれくありいじん
げく地 史記魏世家安釐王四年予秦南陽以

和蘇代曰玉独不見夫博之所以貴梟者便則食不便
則止矣是何王之用智不如用梟也注博頭有刻為梟
鳥形者擲得梟者合食其子若不便則為餘行也
綱鑑注云博即局戲以木為散有梟盧雉犢塞五者
為勝負之米故人刻一散為梟鳥形得之為上勝
晉書表耽字彥道桓温少時遊於博徒資產俱盡求
濟於耽々変服懷布帽隨温与債主戲耽素有藝名
債者不相識謂曰卿當不辨作表彥道也遂就局十
万一擲直上百万耽投馬絶叫以布帽擲地曰竟識
表彥道否其通脫如死

馬いむくりは藁也馬と名づくるもの象戲の

るのこゝ

あゝゝめて益々^{エキ}な事ハ何々々々めぬとよう也
をばあり

論語先進篇魯人為長府閔子騫曰仍舊貫如之
何何必^{シモ}改作^シ

雅房^{ヤフ}大納言^{ダイナゴ}は才^{サイ}かゝる人^トを大納言^{ダイナゴ}もな
さうとておぼへ〜つらつら院^{イン}は智^チなる人^トをいふ
漢^{カン}〜き〜と見ゆらつ〜

〜と官^{カン}をゆけり小雅房^{コヤフ}は智^チふかひし〜
〜ら大納言^{ダイナゴ}あ〜と〜つらつら院^{イン}と中^{ナカ}端^ヘは院^{イン}より
見ゆらつ〜と〜ふ〜
か〜して日^ヒ来^キは学^{ガク}もた〜
〜らり〜りの人^ト智^チも〜
〜らびあれ〜大納言^{ダイナゴ}い〜
虚言^{ウソコト}ハ不^フ便^{ベン}なれ〜
ませゆひけり〜
大納言^{ダイナゴ}のける物^{モノ}と〜
〜び〜
〜ら〜
〜ら〜
〜ら〜

福をみいり歎ねるもは棄てしを悔りぬ
少くも人と思ふなりぬ人よともゆかり
事よゆかりとありて命とて命とて
うてうてとてうてうてとて一切の事
て慈悲の心ありて人倫ありて

雅房大納言正二位村上源氏号後土御門右政大臣
定實公の男

院のを智 此所後深草院なり
龜山後宇多也但後深草龜山六當時法皇欽
近習 礼記月令禁近習注天子親幸者習を押也
をのつとてなりと云
君れは心ありと云

雅房大納言正二位村上源氏号後土御門右政大臣
定實公の男 此所後深草院なり
龜山後宇多也但後深草龜山六當時法皇欽
近習 礼記月令禁近習注天子親幸者習を押也
をのつとてなりと云
君れは心ありと云

佛法を教生とてあり
めて放生とてあり
よとめたりあり
李氏郎氏が剛毅なる事
を友徳あり漢宣帝唐玄宗も是とてあり

又言行録の王荆公閉鶴トウジシは、トウジシのせりり魚
ゆが時分にも相撲入道宗堅閉狗トウジシとこのせりり
あり果して兵礼の前表とて関赤亡びぬ首赤
岐大と教と事と想ごんら次有司トウジシと法りり
りす東坡トウジシの礼と仲居の初と載て故蓋不
弁為狸狗也死して猶其肉とくくりべ次や
もと教さんやと云
畜生殘害 沙害ハそこらひやあり也チウゼウチウキヨ
れたぐひよくいありと畜生沙害と云俱舎リキヤ見え
らりり
菊乃鳥獸チウモウありありきむじりまても
莊子ハ虎狼仁也とあり時をねりりも虎狼

りり又子相くくりりずのりややと卯は鳥獸昆
貴とや夜鶴の子と憶ひ巴猿乃勝と折も是
也桓山の鳥は彼も子の別と悲り羊は跪く
乳鳥の哺とくくり焚の枕子の死母り食
るハ教とをりりやとありや猿ハ編祖と
唯ハ廣ハ席ハ法りみ難とありありと
奇物論のりりり教ハ北土あり鳥ハ雌雄
あり縮くは机奔くは鶴同宿の鴛鴦双飛の
孔翠ハ翼ハ目ハ法府の物ハ至すて皆是まぬ
とありありありや詩周南ハ蝻斯ハ蟋蟀
とありハ餘貴の病りむ事ハありとありと
大鵬ハ怒て飛び窳成が怒りハ乳虎ハこく

越王ハ怒蛙と云ていさむ蟬カニいりて戈ホコと刃を蟪カ
蝮ウリいりて芥ツと云のむいさくく〜いけるもの
いづもくひんあ〜ん

佛即禪師戒殺文鱗甲羽毛諸品類衆生与佛心
無二只爲當初錯用心致使今生頭角異水中遊林
裏戲何忍將來充日計須臾活捉在砧床口不能言
眼還顧或槌搯或刀刺牽入鑊湯深可畏推毛將羽
刮皮鱗刮脊刺心於吐氣羨君喉誇好味勸子勸妻
同啾嗜只知恣性縱無明不懼隍司毫髮記命終
究業至面對閻王爭敢諱後頭一々報無差劫炭鑊
湯何處避勸賢豪須戒忌莫把衆生當容易貪他
一齋還他齋古聖畱言終不偽若能戒殺勤念佛

決判蓮臺上品會

凡そいけるものを殺るゝは教もいへりゆいふ
ゆへは高明教ハ殺生戒と云常の内ハ仁也と云
されば仁と云く〜ゆへは釈迦と結仁と云つ
き〜り入道家ももを禁して孫真人が千金
方と撰〜棄喪水蛭の類とて用ゐるその罪も
天仙と云く〜尸解と云く〜海小虫魚と云本より
つ〜り〜ぬん拔乃〜り〜り切と云と〜り〜り
義ハ〜り〜りて用ゐるあ〜り〜り牛と云て殺るゝ忍び
〜〜〜〜〜鐘よりゆる義あれ〜其義と云
〜〜〜〜〜羊と云〜り〜り殺れ〜り〜り義もあ〜り
〜〜〜〜〜の法用〜り〜り〜り〜り〜り放生

池と稱して田獵をせしめて民を養ふは
伏羲氏ハ佛者の如く小地下に罪人ありんとい
つるまことたれりく是くゆる漢劉公は魚を
献じりものありしに劉公つりてて天の五
穀を生して食ししも獸を産して者とするは
人のことあるりしに時をばけしもくも孔子
けりいれやうもあらず万物を生たのく天地
の氣をうく人のことあふ生むるよあらず人の智
ありてはてもの成るふと成済しり天地の性人
より貴きいれを智あり成也しり伏羲神
農くくめて草木を尊て教多の毒ありて
は五穀とくありては天の物と生むる事

人のことあふありしにす教納人としてひ刺は
おとしむ大何ぞ教納のきあふ人としてし刺は
たためよと生むるをくんやは理と志の時を
わ穀鳥獸の生ずるをく人としてあをす
戒人く物との因生異教する事をとく
程子謁頌云殺則害に放則害義らありんを
つきてユスとくこれハ四時の田獵墾墾の制
法をれく多くこのみてあをむしりたの因費て
はくくくさいんがひすめさくんれ子れ釣
それとも網をくむそれとも宿を射くありし
仁義の至極なりとれ
とくて一切の有情とんて

孔子は仁者の人と愛せしむるひ孟子は赤子お井小
りかどんそ林楊惻隱の心ありと仁の端なりと云
王陽明が大家は端の人の心石ややうくとみて
も抑みみよまの生茂るるとんそは喜びうれ志
がむとんそはうもくも戦の時とぬらふとんそを
んよく抑りるとんそはうもく他人のうもくある
とんそく罪あると人の死はよくとあられむし
ていんや我父母兄弟妻子とやはれよ六歳の
嬰児も父母とんそ愛しわらふ是れから良
知の根なりはよく抑りぬらふ明法とて明法を
是れから仁とれは氏とていひていひていひて
て仁とて時と形と手足のつなとていひていひて

本心よりとてなりぬらふ形を人なりともいふ高
おるれは人倫ありす

顔回は志人に勞をせむとて也とて人となす
り物とてんそは平賊とて民の志ともうとて
うは又いふとてあはれとすうもくいひていひ
志ありとて事ありとておれとて人の誠ありと
事ありとて事ありとておれとて人の志ありと
はうとていひていひていひていひていひて
ていひとていひていひていひていひていひて
おれとていひていひていひていひていひて

小思とておどろかぬとてありて元無等とのふさ
れハ楊柳が孔雀たる人陰績う懐橘の返車
ありてとくを山にありて小思されあまは
たもあれよとわれとわづらふらんてせん
たもとて孟子のいふをわづらふ何隣家よいのて
わづらふんて母をわづらふらんてわづらふん
てわづらふらんて母をわづらふらんてわづらふん
ゆりありてとて然いのこととて孟子よらんて
幼子常視母註する礼の本文よ相叶する
孟子がうらんてわづらふらんてわづらふらん
わづらふらんてわづらふらんてわづらふらん
禅法め
随流認得性無喜亦無憂といふ佛社の頌

あり台教も不起一念はと空劫以前と
威音那畔といひ道家も深沈未分といひ
真空よりこれ喜怒哀樂七情も盡虚客あり
とてこれと絶つてとて水とてわづらふらん
とて杖とてわづらふらんといひ起念の
瓢不生の杖とて家も論ぞり我儒より是れ寂
然感通の理未發に發れ中いかんて七情とて
んやとて真實なりとて虚客ありとて
力をやとてわづらふらんて夏は高の水とて
れと青酒とてわづらふらんて水とてわづら
ふらんてわづらふらんてわづらふらん
酒とのとて人の心とてわづらふらんて水
のわづらふらん

くわつてさきめ也

病シとくハ左傳昭公元年醫和曰晦涵惑疾明
涵シ疾ハ陶隱居云人生氣中如魚在水々濁則魚
瘦氣昏則人病邪氣之傷人最為深重精神者本宅
身以為用身既受邪精神亦乱

七情の病あり事ハ列子ハのあり文撃ク故事ニし
しめ法書ハ多ク醫ハ也ハ多クあり

茶ハのくハ汗ハと未ハ也

密康養生論夫眼藥未汗或有弗獲而愧情一集
渙然流離終朝未餐則囂然思食而曾子銜哀七
日不饑云精神之於形骸猶國之有君也神踈於
中而形喪於外猶君昏於上國乱於下也故君子

修性以保神安心以全身愛憎不棲於情憂喜不留
於意泊然無感而休氣和平又呼吸吐納服食養身
使形神相親表裡俱濟也 文選
凌雲の額と書く

世說新語補十六云凌雲臺樓觀精巧先稱平象
木輕重然後造構乃無錙銖相負揭臺雖高峻常
隨風搖動而終無頽倒ハ理魏明帝登臺懼其勢
危別以大材扶持之樓即積壞論者謂輕重力偏

故也 洛陽宮殿薄日凌雲臺上壁方十三丈高九尺
樓方四丈高五丈棟ハ法地十三丈五尺七寸五分也
韋仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲將登榜
顛之既下頭鬢皓然因敕見孫勿復學書 文選
日韋ハ誕字仲將京兆杜陵人太僕端子有文學善屬辭以
光祿大夫卒衛恒四休書勢曰誕善楷書魏宮觀多誕所

題明帝立陵霄觀誤先釘榜乃箠盛誕轆軫長組引上使
就題去地二十五丈誕甚危懼乃戒子孫絕此楷法着文
家令

又魏書廿一章誕傳あり

抑よあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
しと人と先とあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
こはじ人と勝てぬあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
をろろ事とあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
車とあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
あゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
つとてあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて

き中よあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
智とあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
まははとあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
ひとあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
人ふあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
よままとあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
うとあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
あゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて
官はあゝろろのんじとねて人ふあゝろろのんじとねて

曲礼在醜不爭

論語君子無所爭

おのまことまげて

老子云曲則全枉則直夫唯不爭

故天下莫能与之爭

我力孤存ありて 論語仁者已欲立而立人已欲達

而達人

老子云欲先民必以身後之又云不敢為天下先故能成器長

弟の巻にも勝負と 遜斎閑覽荆公棊品殊下每

與人對局未嘗致思隨手疾應覺其執將敗便歛之曰

本因適性忘慮反苦思勞神不如且已與葉致遠歎手

常贈葉詩有坐成中斷之句是知公棊不甚高詩又云

譚翰寧斷頭悔誤仍搏頰是又未能忘情於一時得

喪也

漁隱叢詠介甫有絕句云莫將戲事擾真情且可

隨緣道我贏戰四能兩套收黑白一枰何處有虧成則

因適性忘慮之語信有證矣若魯且於棊不然如偶

無公事客休時席上談兵校兩棊心似珠絲遊碧落

身如蜩甲化枯枝湘東一目誠其死天下中分尚可

持誰為吾徒猶愛日參橫月落不曾知則若思忘形

較勝負於一着與介甫措意異矣

むつまきき中よたりふも

詩邶風云終風且暴顧我則笑諛浪笑教中心是悼

注莊公く為人狂蕩暴疾狂羞蓋不忍行言之

張子厚東銘戲言出於思也戲動作於謀也

けりぬ與寧よりたよりて

魏其侯武安侯々々

もに漢帝の外戚クワイセキとして名を天下にあらわす酒
けをさるるり何れ灌夫の酒失シツよりてあ人中あ
るくあり身恨ウラミをみみて天子のうらみて
魏其侯灌夫をころされぬ史漢の事傳ふる

人小傷コサ じんこをうらむ

孟子無名と指屈而不信指不若人則知惡之心不若人
則不知惡也謂不知類也又云不耻不若人何若人有
中庸云子曰射有似乎君子失諸正鵠反求諸其身
人よわらんもの思ふに君子はゆるあうがれども
心をなれおころりあみて学官もすまじく
山門乃慈と傳正の目ごとくに我々云々とらふ

掌シナコロ書てみくも福あり門徒もかくいひ
福ありせりりくわん其乃よまあるんあ
さそとあらん傷とてらん若も人といひ
らんと思らば自暴自棄ボウジキするべしゆつり
あうそをけりる君子の徳ありくそは南ん
とれたうらん時よ人よとてまんや
善よやうらむ
論語曰願無伐善
大なり職 孟子九河郷の位と祥 万鐘の福也
うまど一百万の兼金とてうまの勢也

貧ヒツもの財をりてれむら若ハカとりて

礼を以て作がをせりて乃こころ付の迷にやむと
智くいふてゆるきうんは人のあやまり也をを
らぎてあわくらげひいものもが誤なりと
くてかどあつたれぬをみ力をせりてかどあつ
たれ病とく

貪りしものは 曲礼云貪者不以貨財為礼老者
不以筋力為礼

鳥羽作はなまねをせりてな号とあり
はひしよりは名也 元日親王元日の奏賀の勢
甚強勝しと大極殿よりまね作はなまね

李部王の記よりゆり

鳥羽殿 白河院應徳三年立鳥羽殿

元良親王 陽成院の子

元日奏賀の勢 賀賀の所より

大極殿 拾芥云大極殿朝堂院正殿名八省院

又云八省院天子臨朝即位諸司告朔所又謂之中臺

李部王 延喜中子式部々重明親王也其あり
りし記録と李部王記と号と或部と吏部
と云事ハ法式と月どりのを吏と云也行理
行吏行李は字皆通用なりと音同とあり
左傳正義より

物たりは東枕有り也
陽字はうくも有り孔子も東首一
ありし或は南枕常也白河流々
神宮の四方と沙汰なきを
けるなり一 大邦の遠拜は
むめはあり

礼記云寢時東首

孔子も東首一 論語御黨篇云疾君視之

東首加朝服抱紳朱子注云東首以受生氣也新安

陳氏云天地生氣始於東方或問疾君視之方東首

常時首當在那邊礼記自云寢常當東首矣平時亦

欲受生氣恐不独於疾時為然朱子曰常時多東首
亦随意卧時節如記云請席何向請衽何趾這見得
有随意向時節然多是東首故王深云居常戶寢常
東首也常寢於北牖下君問疾則移於南牖下

高倉院法華堂の三時僧あり律師
鏡をたはれて
りる事あり

高倉院 後白河院 亦三の法子

三昧也 思專則志一不分 想寂則氣虛 神朗氣虛

之謂也 玄符用之而致用也 天台止觀略明四種一常

坐二常行三半行半坐四非行非坐 四種三昧

皆依實相實相是安樂 法四緣是安樂之行所

以始末皆依法華 即法華三昧之妙行也 翻譯名

義集詳也

鏡とるりて

三國志魏夏侯惇從征呂布為流矢所中傷九目

時夏侯惇與惇為將軍中号惇為盲夏侯惇怒

次每覽照恚怒輒撲照着地

白樂天感鏡詩今朝一拂拭自照顛賴容照四能重

惆悵背有双盤龍

許渾詩高歌一曲掩明鏡昨日少年今白頭

あしこげのぬ人も人のうへをのこりてそのまを
をまろくふるなり我をくらしめて介を知りて
しつりあるべく次されはをのれをあるを物ある

子未在_レ我者故不_レ患_レ入之不已_レ知不知_レ人則是非邪正
或不能辨_レ故以為_レ患也

老ぬくあゝバヤんぐ閑よ

人生待_レ足何時_レ足未_レ老得_レ閑方_レ是_レ閑

茲と思ふ 尚書大禹謨念_レ茲在_レ茲

雪のうらみ 古今春の日は光にあたり我われ

少くわらうの雪とさうらうりびりき

高瞻詩人生莫_レ遺_レ頭如_レ雪_レ縱_レ得_レ春風亦不_レ消_レ

東坡三馮顛久已歌_レ殘雪

スケスハ 資季大納言入道うらやまける人 具氏宰相中將

よ進てわぬのうられんやあゝ何事成とも茶
ゆきと彦んやといわれぬ具氏いづゆらん
さきとふとあゝあゝあゝいづれは
けりしき事いづれもまほびさうゆり終る
ゆきまてもねいづれもまほびさうゆり終る
あはれ事とこそ言なむあゝいづれかりゆてこ
りとのあゝな事いづれもまほびさうゆり終る
いづれわれがまほびさうゆり終るあゝいづれ
ひるりおれいづれもまほびさうゆり終るあゝ
いづれいづれいづれもまほびさうゆり終るあゝ
いづれいづれいづれもまほびさうゆり終るあゝ
いづれいづれいづれもまほびさうゆり終るあゝ
いづれいづれいづれもまほびさうゆり終るあゝ

かきり

ごよみよ成てふら ころころりれと云ふや
御音とごよみむらあり

秋萩ようひをせれあつ山の山下をみ鹿鳴む
山人あまひじあつ山の山山ひこ想ふやん

野槌上巻八

文政十丁亥十月廿二日夜於燈下写之

中村直道

